主論文の要約

（Abstract of Dissertation）

論文題目：（Title）越前若狭における渡来系伝承の研究

氏　名：（Your name）塩瀬博子

論文内容の要約：

【研究背景】

日本は海に囲まれた列島である。この海は国と国とを隔てる海ではなく、人と人とを結びつける役割も果たしていた。特に日本海はかつて北つ海とも称され、アジア大陸、朝鮮半島、日本列島がその海を囲むように位置しているため、海の道でもあった。日本海岸地域には「あいのかぜ」という言葉が広く伝わっており、その風は外からの来着を可能にした。また海流の働きは大陸や朝鮮半島と日本との間に往来や交渉交流をもたらしてきた。

【研究概要】

日本海岸地域は日本海をはさんでアジア大陸と面するが、その真ん中に位置する越前若狭に焦点を当て、海を通した人の移動とその接触を伝承面からとらえていく。若狭湾は起伏の少ない日本海沿岸のうちで最大の凹部を形成し、それ故に早くから人の往来があった地域とされ、豊かな伝承が残されている。本研究は対象地域が中央から比較的周縁に位置付けられていたという仮説をもとに、このような地域性のある地の渡来系伝承を通し、伝承の持つ意義と人との連関を論じるものである。

【研究目的】

研究の追及論題は伝承と人との関わりである。渡来系の伝承と渡来の人々、来着を受けた共同体や人びとの３つを対象とし、伝説や儀礼などを切り口として人にとって伝承とは何かを考える。それに沿った研究目的は次の４点である。①伝承の特徴を明らかにしたうえで、その形の多様性、また人の移動を受けた共同体や人びとの心態における通時的様相を明らかにする。②伝承主体という観点から伝承各々の現在を見るために、共時的にそれらをとらえる。③伝承が継続していない場合、その要因を考える。④伝承の意義と人とその連関を考える。

【問題の所在】

「渡来」という概念について、用語の解釈、視点という二つの問題が存在し、前者は従来使用されてきた「帰化人」という用語の影響を受け、現在でもその受容国家の優位性を前提とした解釈がされている。また「渡来人」は「帰化人」の解釈を受け、日本への貢献という一面的な観点によって、限られた階層に焦点が当てられているため、研究には多勢を占める無名の渡来者への視点が欠けている。彼らは歴史学、民俗学のうえでも注目されることはほとんどなく、また来着を受けた伝承者への注視に関しては全くと言ってよいほど見当たらない。

渡来系の伝承には文化貢献という面だけではとらえられない一般人の心象と異文化接触を巡る人の多様な動きが内包されているにもかかわらず、それらの見地から検討されることはなかった。

【研究意義と独創性】

本研究は外来者に関してそこにどのような心性が働いていたのかを伝承から見据える試みである。伝承という民俗学的アプローチを取るが、それは異文化の受容と拒否にかかわる伝説研究と伝承の担い手研究のモデルを示すことになる。よって研究の独創性は、地域の伝承を素材として一般の渡来者とそれを受けた伝承者双方を視野に入れること、それによって人の移動と接触に伴う彼らの心態を追うこと、人と伝承の連関を問うこと、その三つにある。地域の事例を調査研究することにより、中央史観からは見えることのない地方の人々の生活文化や精神文化、伝承の持つ地域性や多様な姿が立ち現われる。それと同時に、外来者への心態を見ることは現代人の他者に対する心象を見ることにもつながるものである。

【論文構成と各章の結論】

第 1 章では調査地概要として、日本海岸地域→北陸と山陰→越前若狭（福井県）→越前→若狭→旧敦賀郡の順にそれぞれ他地域との比較も混じえ、地勢・自然環境・風土・歴史・対外交渉などを記した。研究対象地は古代大陸との交渉において要衝の地であったが、山陰と比すると中央の権力浸透が比較的弱く、周縁地であったという仮説を立てた。その理由として地理的気候的条件による環境、鉄などの鉱産資源の弱小さなどをあげ、それ故にかえって独自の地域性が温存され、伝承の中に外来のものに対する精神性が内包されているとした。

第 2 章は本稿が伝承（口承文芸）に基づくため、伝承と伝説の定義とその研究史をまとめ、そこから研究の視点を明示した。日本における口承文芸研究を概観し流れをたどったが、その動向は水平方向の広がりと深まりによって、より立体的な変遷をたどってきたことが確認できた。研究史からの位置づけとして、本研究が伝承研究のうち伝承主体とその心理を問うものであることを明示した。

第 3 章～第 5 章部分はフィールドワーク部であり、越前若狭を 3 区分し、それぞれの調査対象地における人と伝承を記した。第 3 章では「越」と呼ばれた越前中北部における伝承のうち、福井市蒲生町の訪問者行事と越前市白山地区の湧水伝説をまとめた。第 1 節の訪問者行事ではその特徴と伝承の現在に焦点を当てた。調査の結果、①行事がナマハゲの三起源説のうちの 1 つ・「異邦人説」にあたる文献資料や口伝を濃厚に残している、②他地域と比較した場合、訪問者役の扮装・行動の型に遭難した漂着者を想起させるものが際立ち、異邦人を神や祖霊に結びつけていない、という特徴が明らかになった。伝承の現在は 2013 年以降中断（2015 年 1 月時の確認）しているが、その要因は少子化と教育観と家庭環境の変化、伝承者内部での意義消失、担い手育成の不十分さ、実施日の問題、と結論付けた。

第 2 節の湧水伝説では伝説と伝承地の精神的素地について論じた。話の類型として「貴種流離譚」と呼ばれる範疇に入る。百済から漂着した高貴な姫が湧水や稲作伝授、病者治癒などの奇跡を起こして村民から敬愛を受けた言い伝えであるが、聞き取りや祭事の参与観察から伝説は渡来人が優れた文化や技術をもたらした、という典型的な言説であると論じた。伝承の継承背景として、対岸に大陸のある日本海岸地方には繰り返された人の移動の痕跡が残存し、異国の人との接触記憶が人々の間に醸成されている、と指摘した。

第 4 章では福井県の中間、敦賀湾を中心とした 4 地域を記述した。第 1 節ではその湾東部の敦賀市五幡の「蒙古来攻伝説」、第 2 節では敦賀湾周辺に点在する新羅系神社所在地の 3 地域―敦賀市白木、敦賀市沓見、南越前町今庄について述べた。第 1 節の伝説は記紀記録になく、時代は 8 世紀と伝わる。伝承地・敦賀の二面性―大陸交通の要衝地ゆえに受容と拒否を併せ持つ土地柄―を背後に、伝説の生成変化とその現在に注目して論じた。変化には生成→成長発展→衰退→再生再興という流れがあり、成長発展には神社（気比神社）の地位上昇と神官を務めた家系関与があると結論づけた。後に伝説は衰退の途を辿るが、その後中心地に入った一個人によって再生、再び世人に知られるようになった。伝説や民俗が個々人の力によって変容した事例として紹介した。

第 2 節では、旧敦賀郡の新羅系神社と地名について論究した。新羅神社の分布図を作成して考察したが、その結果、① 新羅系神社（含白木、白井、白石など）は九州、近畿、若狭湾一帯に多

く分布、② 伽耶（古くは任那）系神社は山陰山陽地方に多いことが明らかになった。分布図から地域と権力との結びつきとその浸透度合いの反映が読み取れ、若狭湾一帯に新羅系神社、山陰山陽に伽耶系神社という分布は、北陸地方に対する権力介入が山陰よりも弱かったという仮説を証明するもの、と分析した。畿内政権のあった奈良、京都に「シラギ」を想起させる神社がほとんどないことからも、律令政府圧力の強い地域ほど、新羅排外政策の翼下に入らざるを得なかったことを示すものとした。

またこの地域の特殊性として、新羅国の直接的表記の社が 4 社[1]存在し、すべて独立した神社であるということがあげられる。他地域には見られない稀有な新羅神社分布地帯と言えるが、それはなぜであるかを考察した。その結果、次のように類推した。神社名・地名残存や『福井縣史』（1920 年）中での外来族への中庸な記述[2]から、この地の発展と渡来移住者間には分かち難いつながりがあり、彼らとの関わりなしには語れない文化や技術吸収の歴史がある、という観念が地元民に受容されている、と解釈した。

第 5 章では、若狭に伝わる貴種流離譚の 2 事例と、一人の伝承者に注目した。第 1 節で小浜市矢代の「手杵祭」、第 2 節で若狭浦の「王塚」を取り上げ、第 3 節で語り部として活動する人物のライフ・ストーリーを記述した。まず日本における貴種漂着伝承地の分布図を示し、その図から①「流され王」などの貴種流離譚は太平洋岸よりも日本海岸地域に多い、②うつぼ舟伝承は九州から西日本にかけて見られる、③徐福伝承は九州一円と太平洋側に多く分布し、日本海側には少ない、④日本海岸側の貴種流離譚に着目すると九州北部、山口県西部、若狭湾から能登に点在する、ということを指摘した。

第 1 節では、負の伝承に基づく祭りを巡る伝承者の心的変容について考察した。祭りの由来として、ある浦に唐船が漂着したが悲劇的な事件により村に災難が続き、その罪障消滅のために始めたものと伝わる。1942 年殺人祭として報道されたことを契機に、見学者の増加に伴い伝承者間に継続への葛藤が生じた。見学者の関心は祭りの本質よりも負の由来伝承に向けられ、伝承者の気持ちは汲み取られなかった。その後現実的な村内変動で休止したが、要因を①好奇心という人の心理、②情報社会という社会的変遷、③少子高齢化、過疎化という社会的変動、と分析した。

第 2 節では小浜市若狭地区の「王塚」について記述した。1841 年の文献には、異国から渡り来た高貴な王がやがて亡くなりこの地に埋められたとある。しかし伝説集には掲載がなく、塚も荒廃。伝承の消滅と受け取れ、背景要因を探るため調査した。その結果伝承の場から住民が 1000 年前に隣地に移住したことが原因であるとわかった。伝承主体の不在は継続にとって致命的であり、塚にまつわる因果関係が発生しなかったことも背景にあると推論した。

第 3 節では、伝承の今後において示唆に富む事例として、若狭で活動する伝承者の姿を追った。九死に一生を得た後、一人の女性が学校や公民館などで「ふるさとの語り」を次世代に伝える活動を 10 年以上継続し、長年採録した地域の言い伝えも本に著した。豊富な民間伝承があるにもかかわらず記録物がなかった地区で、その行動は昔年長者が子供たちに昔語りを伝えていた語り部としての役割を果たしていることが確認された。また聞き手には、知り得た伝承から地元への誇りが芽生え、その知恵や道理を汲み取っている姿が見出された。

終章では各章の結論をもとに越前若狭の渡来系伝承の特徴、渡来の多様性を総括した。前者では伝承の中に他者に対する二面性、また命名（神社名や地名）に中央から周縁的な位置にあることがうかがわれること、貴種流離譚が日本海岸地方ではかなり多いことなどがあげられる。多様性については、渡来人の本国は朝鮮半島のみならずアジア大陸全体に及び、来着事由も遭難漂着の他、来

---

[1] 4 社表記は白井／白石等ではなく新羅／白城／信露貴彦である。またその他新羅系関連を推定されている社を合わせると 6 社になる。

[2] この縣史には「割合に早くより外来族の渡来移住せるあり、文化の状態一歩を早うせる彼民俗との接觸によりて地方開花の度を早うせるは想像し難からざるなり」とある。新羅や韓国に対する排外的態度には律令時代の新羅蕃国視や 19 世紀後半以降の国家主義下での朝鮮蔑視が見られる。この文献が著されたのは、当時東アジア情勢変化の著しい時代の最中である。

攻（戦争）、戦乱からの逃避（難民）などによる人の移動があり、これまでの通説にあるような固定的なとらえ方ができないことがわかった。

最後に人と伝承についての私論を述べた。伝承を人間の集合的記憶とした場合、伝承者に３つの心態―受容・揺れ・拒否―があることを指摘した。受容の場合、記憶の表象により社や地名などの命名、祭礼行事として伝承が継続、拒否では歳時習俗行事として継承される。しかし、共同体や人びとが外来者の非業な死に直面した場合には葛藤が見られ、その対応に揺れが生じるということを明らかにした。これまでの研究では受容と拒否は論じられることがあっても、その中間で揺れ動く共同体／伝承者の内面状況に触れられたものはなく、このことは異文化接触には複雑な人間の心的構造が存在することを示唆するものである。

また伝承継続には主体内部と外部（社会的変動、価値観の変化）の両面がかかわり、両者動態が一致する場合には継承存続がなされるが、不適合の場合躊躇葛藤を経て中断か消滅に向かうと考察分析した。本研究での伝承類別は、伝説（口碑）、祭事習俗行事、祭礼行事、神社名、地名、命名（古墳）となるが、それらは文字を持たない庶民の土着の歴史と言える。最後に、渡来人に対する一連の心態は現代人の異質な他者に対する心性の本源である、と結んだ。